

日本人の英会話能力を上げるには？

加藤梓乃 佐野友香 高谷奏
指導者 松本穂高教諭 浅野周一教諭

要旨

日本人の英会話能力は世界的にみて低いといわれている。実際にEF EPI2021(英語能力指数ランキング)では112の国のうち日本の順位は78位と、低いレベルに位置づけられており、その見解は偏見であるとは言い難い。一方、書く・読むなどのスキルは高いといわれることが多く、一概に英語指数が低いと言い切れないようにも思える。では、なぜ英語指数が低いとされているのか。その原因は、英語を話す・聞く能力の欠如に由来していると考えた。スピーキング・リスニング能力は自国において軽視されている傾向にあると推測し、本校の生徒に意識調査のためのアンケートを実施した。次に英語能力指数が高いオランダと日本を比べ教育的な観点から調査をすすめた。本校内だけでなく周辺の高校や民間塾の状況も調査し、できる限り情報が偏らないよう努力をした。それらの結果から、今後の我が国の実践的な英語の能力に関して展望を見据えた。

How to improve Japanese English ability?

Kato Shino , Sano Yuka , Takaya Kanade

Supervisor : Matsumoto and Asano

abstract

It is often said that Japanese English skill is lower than that of other developed countries. According to EF EPI 2021 (EF English Proficiency Index 2021), the ranking of Japan is 78th of 112 countries. So, Japan is regarded as a country with low ability of English and we can say the view Japanese people have low English ability is not a prejudice. On the other hand, Japanese is said that writing and reading skill is high. Therefore we cannot say Japanese has low English ability. By the way, why is Japanese skill said to be low? We consider that the cause of it comes from lack of the ability of speaking and listening to English. We speculate that the education of speaking and listening to English is not focused on in Japan, so we took a student's attitude survey in my school. Secondly, we investigated from the educational perspective, by comparing Japan and Netherlands which have advanced English skill. I made an effort not to make you have a bias by conducting detailed surveys of the high school students in other schools and private English school. From these results of research, we looked ahead to the future of Japan about English skill.

第一章 はじめに

この論文の目的は、日本人の英会話能力を向上させるための方法を提案することである。日本は先進国として世界を先導する立場にあるにも関わらず英語能力は平均的にみて低いように思う。実際の英語能力指数について指標としてEF EPI2021 (EF English Proficiency Index2021)の行っている英語能力指数ランキングを用いる。これは、英語を母国語としない国や地域を対象とした、リスニング・リーディング能力を計った指標であり、TOEFLやIELTSなどと同様の信頼性があることが証明されている。以下が対象国の112か国のランキングである。



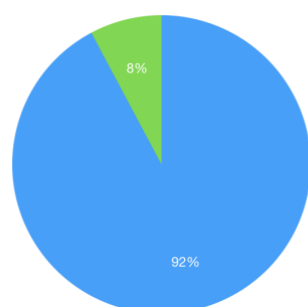
日本の英語能力指数ランキングは78位だ。各国の英語能力レベルが「Very High」、「High」、「Moderate」、「Low」、「Very Low」の5つの段階に分けられているのだが、日本は「Low」に位置づけられており、やはり世界的にみて低いことが伺える。ここで、上位5カ国をみると、1位のオランダに続いてオーストリア、デンマーク、シンガポール、ノルウェーと位置づけられており、4カ国がヨーロッパの国であることから、ヨーロッパでの英語能力が高いということが読み取れる。ヨーロッパ諸国と日本のレベルがここまで大きく異なっているのには、地理的、歴史的な観点によるものが考えられるが、我々は日本人の英語に対する意識の低さや、英語教育のシステムの問題によるものも大きな理由となっているのではないかと考えた。

第二章 意識調査

そこで今回はコミュニケーション英語に焦点を当て、我が校である、土浦第一高校の生徒560人にスピーキング・リスニングに対する学習意識アンケートを行った。

質問1 英②(英会話の授業)は必要だと思うか

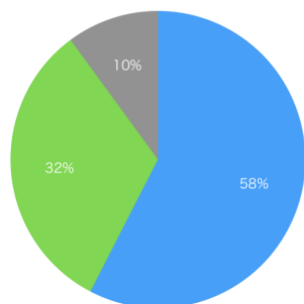
● はい ● いいえ ● その他



はい:92% いいえ:8%

質問2 リーディング、ライティングとスピーキング、リスニングではリーディング、ライティングの方が得意だ

● はい ● 同じくらい ● いいえ



はい:58% 同じくらい:32% いいえ:10%

やはり、ライティング、リーディングよりも、スピーキングやリスニングに苦手意識を持っている人が多いということが分かった。

第三章 日本の英語教育

(1)高校

第一章から高校生の英語を話す・聞くことに対しての能力が低いことを知った。ではなぜそのような事態を招いたのか。ひとつの理由として、日本の教育に問題があると考え、教育的な観点から、まず高校と民間塾を比較した。

我が校では英語の授業は週に五回あるが、スピーキングの授業はその中で一度だけである。さらに、他校への質問の結果から、完全にオールイングリッシュである授業を行っている学校はなく、中にはスピーキングの授業自体がない高校もあることが分かった。まとめると、高校では英語の授業内で日本語を使用しており、スピーキングよりも文法などに重きを置く傾向がある、といえる。

(2)民間の英会話教育塾

民間の英会話教育塾として、AEON つくば桜校様にご協力頂き、アンケートを行った。AEON つくば桜校様では、予習でライティング・リーディング、授業内で英語のみを使ったスピーキングに焦点を当てたものを行い、授業内で難しかったり生徒の反応が悪かったりした箇所などは授業が終わってから確認をする。このように、授業内ではオールイングリッシュを徹底しているとのことだった。また、週に通う日数が多ければ多いほど、スピーキングの能力は高くなるという回答を頂いた。

ふたつの比較から、高校で学ぶ私たちはスピーキングに触れる機会が足りておらず、このことは日本人のスピーキング能力が低くなっている一つの要因であると考えた。

第四章 海外の英語教育

(1)CEFR

次に海外の英語教育との比較を試みた。比べる対象は第一章で取り上げた英語能力指数ランキング、EF EPI2021にて1位という英語能力の高さを誇っているオランダである。

英語能力を数値化するためにCEFR(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment:外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠)という指標を用いた。CEFRの定義については文部科学省(平成30年3月)が次のように示している。

CEFRは、語学シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集、外国語運用能力の評価のために、透明性が高く、分かりやすい、包括的な基盤を提供するものとして、20年以上にわたる研究を経て、2001年に欧州評議会が発表した。

各資格・検定試験とCEFRとの対照表

文部科学省（平成30年3月）

CEFR	ケンブリッジ 英語検定	実用英語技能検定 1級・3級	GTEC Advanced Basic Core CBT	IELTS	TEAP	TEAP CBT	TOEFL iBT	TOEIC L&R/ TOEIC S&W
C2	230 200 (230) (210)			9.0 8.5				
C1	199 180 (190) (180)	3299 2600 (3299) (2600)	1400 1350 (1400) (1350)	8.0 7.0	400 375	800	120 95	1990 1845
B2	179 160 (170) (160)	2599 2300 (2599) (2300)	1349 1190 (1349) (1190)	6.5 5.5	374 309	795 600	94 72	1840 1560
B1	159 140 (150) (140)	2299 1950 (2299) (1950)	1189 960 (1189) (960)	5.0 4.0	308 225	595 420	71 42	1555 1150
A2	139 120 (130) (120)	1949 1700 (1949) (1700)	959 690 (959) (690)		224 135	415 235		1145 625
A1	119 100 (110) (100)	1699 1400 (1699) (1400)	689 270 (689) (270)					620 320

○ 表中の数値は各資格・検定試験の定める試験結果のスコアを指す。スコアの記載がない欄は、各資格・検定試験において当該欄に対応する能力を有していると認定できないことを意味する。
 ※ ケンブリッジ英語検定、実用英語技能検定及びGTECは複数の試験から構成されており、それぞれの試験がCEFRとの対照関係として測定できる能力の範囲が定められている。当該範囲を下回った場合にはCEFRの判定は行われず、当該範囲を上回った場合には当該範囲の上限に位置付けられているCEFRの判定が行われる。
 ※ TOEIC L&R/TOEIC S&Wについては、TOEIC S&Wのスコアを2.5倍にして合算したスコアで判定する。
 ※ 障害等のある受検生について、一部技能を免除する場合等があるが、そうした場合はCEFRとの対照関係については、各資格・検定試験実施主体において公表予定。

A1は最低限の日常会話の表現を使え、ゆっくりはきはきとした話し方であれば理解することができるレベル、A2は身近で日常の事柄について情報交換をすることのできるレベルであるとされ、A2のほうが高い水準となっている。オランダは12歳までにA1-A2レベルに到達しているといわれている。一方日本は、文科省（令和元年度）「英語教育実施状況調査」より、高校卒業時でA2レベルであり、その差は明確である。

なぜここまでの差が生じるのか。原因は日本が島国であることや、母国が英語圏と離れていることなど様々なものが考えられるが、先に何度も述べているように、今回は教育という視点に限って考えた。CEFRレベルの結果からオランダの英語能力の指数が高い秘訣は幼少期からの教育にあると推測する。

(2)オランダの英語教育～four-phase model～

オランダは4、5歳から任意で英語教育を受け始め、大半は小学校入学とともに英語学習が始まるという。英文法についてはあまり詳しく追及せず、話すことを重視した楽しい授業が展開されている。具体的な授業方法として注目したのは「four-phase model」と呼ばれるシステムである。これは4段階の過程を通して英語に親しむというものであり、実践的な英語能力の取得を狙いとしている。山口大学の「オランダの4段階モデルを活用した小学校外国語活動」を先行研究として、4段階モデルの説明を以下に示す。

- 1, introduction phase…新しいトピックへの動機づけ、既存の知識の活性化
- 2, presentation phase…新出事項の提示、受容的活動
- 3, practice phase…新出事項を中心としたドリル的産出活動
- 4, transfer phase…既習事項と新出事項の融合を図る、場面を設定したより自由な産出活動

具体的にいうと、第一段階「introduction phase」（以降「導入」と表記する。）では、教師が提示したトピックについて既に知っている英単語を挙げるという、既存の知識を引き出す活動が行われる。例えばトピックが「animal（動物）」だったら「rabbit」「dog」など英語でいえる動物を生徒が挙げる。この活動の目的は英語の知識を持っているという自信を生徒にもたせ今後の英語学習のモチベーションに繋げていくことだ。第二段階「presentation phase」（以降「インプット」と表記する。）では、日本の中高生がやっているリスニングの授業と似たようなことをする。英語を聞いて意味を理解するというのが目標であり、英語能力の不足を補うため問題文は母国語で記されていたりイラストが提示されていたりする。分からない単語があれば辞書で調べて新しい表現や単語を学んでいく。第三段階「practice phase」（以降「練習」と表記する。）では、日本でよく行われている英文法の授業と似たようなことをする。文章の穴埋めや翻訳などである。だがパズルゲームや歌を歌うなどのアクティブな活動もあるようだ。最後に第四段階「transfer phase」

(以降「応用」と表記する。)では、実際に英語を使う場面に合わせてある程度の自由度をもって長いやり取りをする。例えばレストランという設定が設けられているとき、店員の役なら「何を頼むのか」や「ご注文は以上ですか」などの既習事項である定型文をいう。しかし、何を頼むかなどは生徒の自由であり、個性が現れるところでもあるため生徒は楽しんで英語を使うことができる。この「応用」の活動の目的は既習事項と新出事項の融合を図り、これまで習った表現をリアルに使うという経験を得るということである。私たちが四段階モデルについて簡単にまとめたものを次に提示する。

①導入

活動:既存の知識の確認

目的:知っている表現を挙げることで自信をつけ、今後の学習へのモチベーションを上げる

②インプット

活動:リスニング問題中心

目的:新出事項である表現や単語を音と一緒に覚える

③練習

活動:翻訳・穴埋め問題・朗読

目的:新出事項である表現や単語を定着させる

④応用

活動:身につけた表現を実際に使う機会を設ける

目的:自分の意思で学んだ表現を選択できるようにする

第五章 日本人の英会話能力をあげる方法

これらのシステムを日本に適用することはできないか、検討してみた。だがこのような考えは今までに多く考えられ、様々な課題点が浮き彫りになっている。主にあげられるのは三つである。

一つは日本の英語の基礎能力がオランダと比べて欠如しているという点だ。オランダでは幼い時から英語に触れる機会が多いのに対し、日本では一部の子供を除いて大半は母国語のみを聞いて育つため外国語に対して距離がある。だから、最初のうちは語彙力が乏しく、第一段階である、知ってる言葉をあげるという活動は極めて困難であろう。二つ目に危惧されるのは、時間的な問題である。日本の子どもたちが聞き覚えのない未知の言葉を聞いて、それをある程度の自由度をもって使えといわれても、当然無理なことと思われる。したがって、インプットからアウトプットへの移行には時間をかける必要がある。三つ目は生徒の倦怠を招く危険性があるということだ。これは問題点というより、留意すべき点なのだが、英語を使ったゲームなどをする際、それが頭を使って考えない簡単なものであったり、いつも同じパターンであったりすれば、児童の授業に対する意欲は薄れてしまう。特に外国語学習のような生徒にとって新しいものは、できることに制限がかかり恒常化してしまうように思う。

以上の三点をまとめると、日本の子供たちのレベルに合った、理解できる内容でありながら頭を使う必要のある授業形態を提唱する必要がある。よって四段階の授業展開を日本に適用するのは難しいのではないかという結論に至った。そこで、大きなアレンジの必要性を重視しつつも、四段階モデルの流れを参考にした日本独自の英語学習を試案として提示する。

日本の小学校での授業は、オランダと比べて言語を覚えさせることよりも他国の文化に触れることに重きを置いている傾向にある。そのため最初は英語以外にも多くの国の言葉に軽く触れていく。例えば「ありがとう」は英語では「Thank you(サンキュー)」、韓国語では「감다(カムサハムニダ)」、中国語では「谢谢(シェシェ)」など簡単な挨拶をカタカナ表記で学んでいく。これは既存の知識であることが多いため、生徒の「それ知ってる」を引き起こす第一段階「導入」とであると見なす。次にそれらの簡単な表現を使ってゲームをしたり友達同士で言いあったりとアクティブな活動をする。これは多少の自由度があることから、「練習」や「応用」にあたるものであると考えた。基本的に一般的な小学校であればこのような活動が行われ、英語は他の言語よりも詳しく表現を知っていくという具合だ。そして中学校に入ってから文法をかため、

リスニングは二の次といったような授業を受ける。中高生の授業を四段階に照らし合わせるなら「練習」から「インプット」という順番でその二つの段階を中心的にやっているというわけである。

ここで私たちなりの問題点を挙げる。一つ目は、幼少期、言語学習の基盤となる時期に第二段階の「インプット」が抜けており、また「練習」と「応用」の境界線を曖昧に捉えてしまっているというところだ。先に述べたように、四段階モデルはそれぞれの段階で目的があり、どれかひとつが欠けてしまうと生徒の知識も浅いものになってしまうのだ。ゆえに生徒の外国語に対する知識の土台はあやふやになり、表現の意味を理解して発音するということさえ難しくなる。意味が理解できなければ子どもたちのモチベーションも下がり、当然英語を毛嫌いする子も出てくるであろう。二つ目は、中学校に入ってから授業では、文法の重視により、「練習」が授業のほとんどをしめているという点である。文法を覚えてからリスニング問題を課されることが多く、実践的に英語を使うという意識は薄い。この二点、すなわち「段階の抜け」と「段階の逆転」という全体的にみた授業展開の課題を解決することが最初の問題だ。

次に問題となるのはそれぞれの段階における課題点である。これを「個別的にみた段階の課題点」と表記する。前述している、日本にオランダの四段階モデルをそのまま適用するのは難しい、というのがこの課題にあたる。私たちの考えた「個別的にみた段階の課題点」の改善方法・留意点を以下に述べる。

① 導入

日本人に合わせて語彙力が少なくても意欲が高められる活動にする。

②及び③ インプット、練習

小学生でも飽きないような楽しい活動にする。もしくは覚える意識を高めさせる授業内容にする。

④ 応用

頭を使って意味を考えながら英語の表現を使わなくてはならない活動にする。

自由度はオランダよりも低く設定する。

これら「段階の抜け」「段階の逆転」「個別的にみた段階の課題点」を念頭に置き、ここでは具体的な授業方法を一例として紹介したいと思う。まず、トピックを設定する。ここでは「animal(動物)」をトピックとしての設定した場合の授業の進め方を提示する。第一段階として、教師が5～10単語分のイラストを生徒に一つずつ見せていく。(犬、猫、さる、ネズミ、牛など)この際、生徒はそのイラストが何を示しているのかを日本語で答える。ここで、先行研究によると、日本と海外の違いを知るのも良いことだが、共通点を知ることと親しみを感じられると言う記述があったため、パンダやライオンなど日本語と同じ発音を持つ単語も2～3個入れると良い。そして、先生が英語での発音の仕方を教え、生徒は繰り返す。ここでのリピート練習では、先ほど提示したパンダやライオンが日本と英語も同じ発音なんだ、という「気づき」を重視しているため、単語を覚えることは強要しない。また、日本語発音の英語となってしまうように、発音やアクセントの違いも合わせて教える。第二段階として、教師とALTによるデモンストレーションで1,2往復ほどの会話をを行う。

例1	A. I like dogs.Do you like dogs?
	B. Yes. I like dogs.Dogs are so cute!
	A. Look! This is a cow.
	B. Wow,a cow is white and black.

ここで、本来はtheyやitなどという代名詞を使うべきところを、そのままdogsやcowとしているのは、小学校のうちは正しい英語(文法など)に触れるというよりも、英語に親しむ事を目的とするため、文法には重きを置いていないからである。この時、dogのところでは、イラストを見せたり、cuteという表現のところではハートのジェスチャーをする、文脈にあった表情をするなど、生徒が視覚的にわかりやすくなるようにする。ただ、ジェスチャーを多用すると、dogやcuteの時に言葉を理解するより、ジェスチャーに集中してしまうという可能性もある。また、like、cuteなどの単語を知らない場合は、その都度説明を入れたり、トピックテーマでない単語(whiteやblack)などは確実に覚えさせるわけではなく、視覚的に印象に残せるとよいと考えた。

ここでは動物の名前の理解が目的であるため、ここではそれらの単語を完璧に覚える必要はないが、第四段階では、既習事項と新出事項を融合させて活動するため、語感を覚えておくことができるとなおよ。ここでは、聞いて理解することがテーマであるため、何度かデモンストレーションを繰り返し、後半ではクイズのように、「何について話していたのか」ということを問いかけるなどして、理解の定着を図る。

第三段階として、「言ってみる」活動であるが、これは今でも日本でよく行われているであろう、いわゆる「repeat after me」である。ここでは、1の段階で使用したイラストカードの絵を見せて生徒たちに瞬発的に英単語を出してもらおうという活動ができる。第四段階では、「考えて使う」活動である。ここで補足であるが、先行研究から第一段階から第四段階を一コマの授業(45分)でやろうとすると、深い定着が見込めないため、4コマほどの授業に分けて定着を図る。またこの最後の段階では、クラスメイトの前で自分の好きな動物の簡単な紹介をする。ここでは、考えて使ったり、より自由度を高くしたりするため、自分の本当に好きな動物をあげる。例えば、犬や猫に限らず、シマウマやワニなど英単語としてあまり馴染みのない動物も良しとする。英語での言い方がわからない時は、タブレット端末が普及している現在、インターネットで検索してみても良いと思う。

第六章 まとめ

まず最初に、日本はやはりほかの先進国と比べて、英語能力の水準はやはり低いとわかった。そして、その水準はオランダの事例や民間の英会話教育塾の事例から、まだ高められる余地があると考えられる。第二章で提唱したオランダの事例であるfour-phase modelを英語に触れることが少ない日本人のためにアレンジした教育方法により、その水準は高められるだろう。今回は紹介するだけにとどまってしまったが、民間の英会話教育塾から得られたスピーキングを中心とした授業への転換も今後必要になるだろう。

謝辞

本稿執筆にあたり、ご協力をいただきました全ての方に、この場を借りてお礼申し上げます。

参考文献

EF EPI(2021)世界最大の英語能力指数 ランキング

<https://www.efjapan.co.jp/epi/>

(2021年7月15日)

D-SCHOOL(2018)非英語圏でNo.1! 高い英語能力を誇るオランダの「小学校英語教育」事情

<https://azby.fmworld.net/kids/parents/040a/?supfrom=backnumber>

(2021年11月5日)

文部科学省(2018)各資格・検定試験とCEFRの対照表

https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/03/_icsFiles/afieldfile/2019/01/15/1402610_1.pdf

(2021年11月5日)

文部科学省(2019)令和元年度「英語教育実施状況調査」の結果について

https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1415043.htm

(2022年1月31日)

猫田和明(1999)オランダの小学校英語教育

https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/3/33427/20141016193516761377/CaseleResBull_29_1.pdf

(2021年12月2日)

猫田和明(2012)オランダの4段階モデルを活用した小学校外国語活動

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jcrdajp/35/3/35_KJ00009505527/_pdf

(2021年12月2日)